

## 令和5年度 研究評価報告書【畜産試験場】

### 1 概要

試験研究機関における課題選定をはじめ、研究途上の課題の進捗状況、研究成果、研究成果の普及状況等について検討・評価し、試験・研究開発の効率化を図ることや積極的な情報公開により幅広く意見を取り入れ、試験・研究開発の活性化を目的に、「福井県農林水産試験研究評価実施要領」および「福井県農林水産業活性化支援研究評価会議設置要領」に基づき、研究課題の選定および研究成果の現地効果等について評価を受けた。

- (1) 開催日時 令和5年7月18日 9時30分 ～ 12時00分
- (2) 開催場所 畜産試験場
- (3) 評価委員
  - 田島 清 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構畜産研究部門  
研究推進部長
  - 三浦孝太郎 公立大学法人福井県立大学生物資源学部 教授
  - 吉田 美香 福井県食肉事業協同組合連合会 事務局
  - 黒川 友紀子 有限会社 黒川産業
  - 関山 真民 芦原温泉女将の会（あわらグランドホテル女将）
  - 佐々木 康一 福井県農林水産部中山間農業・畜産課 課長
- (4) 畜産試験場
  - 竹内 将史 場長
  - 田辺 勉 家畜研究部長
  - 朝倉 裕樹 企画支援室長
  - 佐藤 智之 主任研究員
  - 山本 竜也 主事
  - 朝倉 利江 中畜課主任

### 2 評価結果

課題評価は、研究課題ごとに担当者から研究の背景、目的、内容、実施方法および成果などについて説明を行った後、委員との質疑応答により評価を受けた。

評価結果は各評価委員の平均を総合評価とし、さらに指導、意見をコメントとして記載している。

研究課題別評価

事前評価：1 課題 B 評価

追跡評価：1 課題 C 評価

研究課題別の詳細は、研究課題別評価結果に記載し、今後の研究開発の推進、成果の普及方法等に活用する。

### 3 研究課題別評価結果

#### (1) 事前評価

1	研究課題	若狭牛の品質向上と増頭に向けたビタミン B 群 給与試験	総合 評価	B
	研究期間	令和 6 年度～令和 1 0 年度		
	研究目的 および必要 性	<p>脂肪交雑（サシ）が豊かで単価の高い牛肉生産には、ビタミン A コントロール技術が必須であるが、重大なリスク（突然死や事故）を抱えている。</p> <p>このリスクを回避し、従来なら落伍していた牛の品質向上や出荷を可能とし、また経験や知識の浅い新規就農者でも安全に安心して高品質な若狭牛生産が可能になる飼料給与技術を確立する。</p>		
	主な意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・若狭牛のブランド化を更に進めることにつながり、県民に対して貢献できる。</li> <li>・ビタミン A コントロールを行わなくても枝肉格付の高い若狭牛を生産するために適切な試験となっている。</li> <li>・本課題は 5 年間で十分達成が可能だと考えている。</li> <li>・ビタミン A コントロールを行わなくても若狭牛を生産できれば、肉質に加えてアニマルウエルフェアにも配慮した牛としてブランドの付加価値を付けることが可能。生産者への理解を進めて欲しい。</li> <li>・ビタミン A コントロールをせずに BMS を上げるという課題設定は良いが、アニマルウエルフェアをあまり主張すると畜産農家全体を否定するようなことになるので慎重にした方が良い。</li> <li>・肥育試験がビタミン B 追加区 1 発勝負なのでビタミン A と B のバランスの良いところを探る試験をしたいところ、今回の試験では、多めのビタミン B で差が出せるかがポイント。</li> <li>・上手くいけば若狭牛の高品質化が可能で波及効果は高いと思う。</li> <li>・農家の不安減少、出荷頭数増はとてもよいと思うが、若狭牛のほとんどは A4 以上であり、食肉事業者の声としては A3、A4 を消費者はより好むとのことで、そこまで高格付けにこだわりすぎなくても良い気がする。</li> <li>・新しいことにチャレンジするが、その技術がなかなか普及しないのでは意味がないので、コスト面や生産者への理解などスムーズに導入できる体制を整えることが必要。</li> <li>・供試頭数はもう少し多いと良い。</li> <li>・ビタミン A コントロールに頼らなくとも、BMS の高い牛が生産できることが明確になれば、県内はもとより県外への波及も期待できる。</li> </ul>		

## (2) 追跡評価

1	研究課題	簡易牛舎における繁殖雌牛の周年放牧技術の確立	総合 評価	C
	研究期間	平成28年度～平成30年度		
	研究目的 および 必要性	繁殖雌牛頭数や農家戸数の減少に対し、和牛繁殖基盤を強化するため新規就農者の確保が急務である。初期投資が少なく新規に取り組みやすい農業用パイプハウスを簡易な牛舎として利用した周年親子放牧による繁殖雌牛の周年放牧技術の確立を目指す。		
	主な意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 導入戸数5戸を予定していたが、チャレンジングな研究技術なので新規導入1戸でも県民に貢献したと考える。</li> <li>・ 周年親子（繁殖）に限らず、放牧肥育にも横展開することで飼料費の削減に結びつくことから、今後の普及に期待したい。</li> <li>・ 低コストで子牛が生産できれば県内畜産農家にメリットがあり期待できる。</li> <li>・ 積雪が多い年でも倒壊しない安心感がないと普及は難しいと考える。</li> <li>・ 大雪の不安解消のため、ハウス強度を高める費用の助成等があると導入を希望する方が増えるかもしれない。</li> <li>・ 放牧肥育の普及も視野に入れて進めていくと良い。</li> <li>・ コストを抑えたい導入時には特に魅力的な話だが、普及しなかったのは残念だ。ハウス牛舎が雪でつぶれてしまうと結果的にコストが掛かってしまうところが残念。</li> <li>・ ハウス牛舎を活用した周年親子放牧は大変興味深く今後に期待したい。</li> <li>・ 普及が難しい要因を深く掘り下げた上で、あくまで坂井地区など比較的雪の少ないところに絞って再度広めていくのか、作戦を変更して放牧肥育やレンタル放牧または畜種も変えるのかなどの具体策を明確にして再検討した方が良い。</li> </ul>		

## 4 総括

### (1) 課題名：若狭牛の品質向上と増頭に向けたビタミンB群給与試験について

若狭牛の品質を保持しながらアニマルウェルフェアにも配慮した飼養技術を開発することは、ブランドの維持と生産者の負担軽減につながる。また、増頭・増産も期待できることから研究の実施をお願いしたい。若狭牛は品質と同時にアニマルウェルフェアにも配慮して牛にも優しいことが、更なる付加価値につながる。一方で食肉業者さんの声として、消費者はA3, A4の肉を好むという声もあるため、ブランド牛としてはA5にもこだわりつつ、A3, A4の肉の生産にも目を向けて欲しい。さしの入りを重視するため、肉色が白くなる（なりすぎる）という声もあった。牛の飼養試

験は 27 か月という時間がかかるが、その期間何も発信しないのは良くないので、こんな試験を実施しているなど、適宜情報を私たちや県民に提供していくことが大事である。実際にはサシはどうなっているとかは試験終了まで分からないが、こんな試験をしているとか、成長に影響ないとかの情報を提供していった方が良い。

**(2) 課題名：簡易牛舎における繁殖雌牛の周年放牧技術の確立について**

予定していた導入戸数が 5 戸で実績としては、1 戸であるため、C 判定ではあるが、私としては導入 1 戸あればよいと思っている。平成 30 年と現在では気候状況も変わってきていることから本研究成果をそのまま今に当てはめるのは困難である。周年親子放牧はいわゆる繁殖技術であるが、繁殖にこだわらずに放牧肥育等にもこの研究成果の横展開を考えていただきたい。これによりこの研究で得られたノウハウ等が別分野に広まることを期待する。